

Title	「死者の書」の主題
Sub Title	The theme of "Shisha no sho"
Author	高梨, 一美(Takanashi, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1984
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.46, (1984. 12) ,p.52- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00460001-0052">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00460001-0052</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「死者の書」の主題

高 梨 一 美

「死者の書」は、折口信夫が執筆して完結した唯一の小説である。折口信夫は主として学術論文を本名で、小説・戯曲・叙事詩等の創作と歌作を釈道空の筆名で発表した。池田彌三郎先生が再三指摘されたように、折口の学問と創作とは表裏一体のものである。<sup>(1)</sup>折口は「史論の表現形式としての小説(劇)」を持論としており、「死者の書」はその最も成功した作品であったと考えられる。「死者の書」の構想と「史論」の性格を検討して、本作品の主題を考察したい。

## 一、二つの発端

A 「日本評論」本

昭和十三年十二月 箱根に籠り、「死者の書」執筆。(全集年譜)

昭和十四年一月 雑誌「日本評論」一月号に「死者の書」を発表。

伊豆大仁において続篇を執筆。(全集年譜)

昭和十四年二月 同誌二月号に「死者の書(正篇)」を發表。

昭和十四年三月 同誌三月号に「死者の書(終篇)」を發表。

## B 単行本(現行本)

昭和十八年九月 章段のさしかえ、全文に渉る推敲など、大幅な改訂を加えて単行本『死者の書』を青磁社より刊行。

昭和二十二年七月 角川書店より再刊。卷末に「山越の彌陀」を付す。(「山越しの阿彌陀像の画因」(昭和十九年七月発表)を改題したもの)

※以後『折口信夫全集』や『文学全集』、文庫等に収録された「死者の書」は全てB系統の本文である。

詩人、天沢退二郎氏は「死者の書」<sup>(2)</sup>について興味深い指摘をしておられる。「死者の書」には二つの作品と、それぞれの二つの発端がある。冒頭の天津皇子のよみがえりを発端とする物語——「死者の書」という作品と、郎女が二上山に没する夕日の中に倂人を見たことを発端として成立した曼陀羅図という作品が、二重に存在するという指摘である。二つの作品の存在については異論がないわけではないが、この物語が二つの発端をもつことはまず確かであると言ってよいだろうと思われる。

折口は単行本をまとめるに当って、冒頭の章のさしかえを行なった。現行本は二上山の塚の中で死者がよみがえる幽暗な情景から始まるが、「日本評論」本は南家郎女が朝方、当麻寺へ到着し、前夜の雨に洗われて鮮やかに照り輝く伽藍を拝する場面から始まっている。天津皇子のよみがえりを発端とする「死者の書」と、南家郎女の当麻寺到着を発端

とする「死者の書」とでは、読者としても作品から受ける印象が相当に異なるが、より以上に重要なのは作者の構想とこの二つの「死者の書」の関係である。以下章段のさしかえ全体を詳しく検討したい。

表1

A (日本評論本)	死者の書				死者の書 (正篇)				死者の書 (終篇)												
	穆天子伝	一	二	三	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	
B (単行本)	ナン	六	七	三	四	一	二	五	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十

表2

時期	藤原南家郎女	章段	大津皇子	A	大伴家持	A
天平宝字二年冬	郎女は奈良の家で父から贈られた称讃浄土経を書写し初める。	A				
天平宝字三年春分の日	二上山の峰の間に没する入り日の中に初めて荘厳な佛人を見る。	B				
秋分の日	再び佛人を落日に見る。					
天平宝字四年三月六日 (春分)	千部写経を果たして落日を待つが、雨が降る。其夜奈良の家を出奔する。					
三月七日	嵐の中を夜通し歩いた郎女は朝方当麻寺に到着す					

<p>夜</p> <p>三月八日朝</p>		<p>同日夜</p>	
<p>て郎女に深更、もの訪れる足音</p> <p>到着し、前後策を講ずるが、</p> <p>我が身を奈良の館の人々が</p> <p>鳴く音を聞きながら、昔語</p> <p>りの出雲嬢を思い起し、</p> <p>晴れわたる空の下で鶯の</p>	<p>りの戸を激しく揺る音があ</p> <p>り、鶏鳴と共に止む。</p>	<p>るつて藤原家の天若みことな</p> <p>際し、耳面刀自を見て執心を</p> <p>部に法蔵院の庵皇子が死に</p> <p>部姥から大津皇子が死に</p>	<p>す。寺の者に発見される。</p> <p>を遠望し、二上山を眺めて、</p> <p>この山に心ひかれる様にな</p> <p>ったいきさつを思い起こ</p>
<p>終 ← 終 ← 終</p> <p>8 ← 7 ← 6</p>	<p>← 正 4</p>	<p>← 4 3</p>	<p>← 1 →</p>
<p>13 ← 12 ← 11</p>	<p>← 5</p>	<p>← 4 3</p>	<p>← 6 →</p>
<p>城の開歩を都の朱雀大路を騎乗で</p> <p>京の眼を内くに、東大寺四天王像</p> <p>の時来とめぐる現状を噂話や、石城</p> <p>勢装を中心に、平</p> <p>を歩聞する内くに、東大寺四天王像</p> <p>開眼をめぐらる現状を噂話や、石城</p> <p>京の時来とめぐる現状を噂話や、石城</p>	<p>を覚し、大津皇子であることを自</p> <p>を乞い願う。</p> <p>を乞い願う。</p> <p>を乞い願う。</p>	<p>来核がてらる魂子し年塚</p> <p>み核がてらる魂子し年塚</p> <p>がと、宿た散バ覚い靈大に、中</p> <p>えし、宿た散バ覚い靈大に、中</p> <p>って執記らラ醒に魂津刑五</p> <p>てよを憶けバすよが皇死十</p> <p>るれ中といめ郎人人外</p> <p>。にから、をに女た家当</p> <p>答えこの塚すの魂のちの麻</p> <p>えこの塚すの魂のちの麻</p>	<p>正 1</p> <p>← 1</p> <p>正 2</p> <p>← 2</p>
<p>その正 その正</p> <p>← 4 ← 4</p> <p>← 9 ← 8</p>			

	ある日の夕	を聞き、帷帳を掴む白い指を見る。そして自身水底に沈み白玉となる夢を見る。目覚めて月光の反映に佛人を見る。	←	←							終9
						ての会話をかわす。	押勝郎で押勝と家持が郎	女出奔の噂や、時勢につい	←	←14	

(以下は全て郎女の身の上)

それ以後郎女は深更のもの、の訪れを待つが、次第に遠ざかり、空しく日々が過ぎる。躑躅の盛りのある日の昼、山籠りをした里の娘たちが通り噂話をして帰る。その夜郎女は夢に佛人を見て、肩に衣を着せたいと思う。(A終10・B15)

初夏の頃、若人たちの藕糸縫りに郎女が助言して、強い糸をつむぐ。(A終11・B16)

秋分の夕、郎女は当麻寺の大門から二上山の峰の間に沈む夕日に佛人を見る。(A終12・B17)

淳仁天皇の即位により生母の里方である当麻の里はにぎわうが、郎女は佛人の素肌をおおうための衣を藕糸で織り続ける。夢に当麻語部姥が尼の姿で現れて織り方を教えてくれる。(A終13・B18)

初冬に織りあがり、再び夢で化尼の教えをうけて裁ち縫う。(A終14・B19)

郎女は奈良の家から絵具をとりよせて、秋分の夕、当麻寺から仰ぎ見た佛人の姿を描きあげ、どこへともなく去る。

(A終15・B20)

※この表は時間の推移を軸として、事件の経緯を示した。正篇の5章・現行本の10章は郎女の生い立ちと教養の背景を説明したものであり、繁雑になるので省略した。なお表中の矢印は物語の叙述の進行を示す。

表2を見ていただければわかるように、折口は雑誌連載時には、南家郎女の当麻寺到着から物語を始めている。そして郎女の回想として、当麻寺へ来ることになったいきさつを説明し、その夜、当麻語部姥から大津皇子の物語を聞く所まで、第一回発表分は全て郎女の身の上になって叙述を進めている。大津皇子自身が登場するのは第二回発表分、「死

者の書(正篇)」であり、一、二、三章と大津皇子のよみがえりを中心とする叙述が続き、四章で初めて、死者の世界と生者の世界が直接に交錯するのである。「日本評論」本は時間の推移にそって叙述が進行しており、事件の経緯がわかりやすいが、反面これを初めて読む人にとっては、郎女の叙述と大津皇子の叙述がどんな結びつきを持つのか、暗示はあるが、なかなか明確にはされず、つかみにくい欠点があるだろう。折口はこの点を顧慮して、単行本で章段をさしかえて、死者の世界と生者の世界が交互に現われる形に改めたらしい。(加藤守雄先生の証言による)<sup>(4)</sup>

死者の書は古代エジプトにおいて死者を墳墓に葬る時に、共に埋葬された死者のための手引書であり、死後の世界を描いたものである。折口が「正篇」の一の大津皇子のよみがえりの章を単行本で冒頭にすえたのは、冒頭を大切にする彼が、この章こそ最も死者の書らしい部分であり、「死者の書」のエッセンスであることを示したものと考えられる。雑誌連載時に、第二回発表分をあえて「死者の書」の「正篇」と名告ったことに、既にこの意識が窺われる。

しかし、「正篇」に対する第一回発表分の位置については疑問がある。第一回発表分は単に前篇、或いは序章として片づけることのできない内容があり、冒頭に「中国の死者の書」<sup>(5)</sup>である穆天子伝の引用を配している。これは単行本で削除された。また第一回発表分と「正篇」の筋立ての間には一つの矛盾がある。表2を見ていただければわかるように、「正篇」の四章は時間的には、第一回発表分の四章に接続する。三月七日の夜更け、万法蔵院の庵室で郎女が、当麻語部姥が神憑りして大津皇子の物語を語るのを聞く場面である。語部の語りは夜通し延々と続いて、終わりの頃には「もう東白みの明りが、部屋の内物の形を、朧ろげに顕しはじめて居た」<sup>(6)</sup>とある。「正篇」の四章はこれをうけて万法蔵院の夜明けの情景を描写しているが、最後に次の様なことが述べられている。

たゞ一刻ばかり前、這入りの戸を揺つた物音があつた。一度 二度 三度。更に数度。音は次第に激しくなつて行

つた。柩がまるで、おしちぎられでもするかと思ふほど、音に力のこもつて来た時、ちようど、鶏が鳴いた。其きりびつたり、戸にあたる者もなくなつた。<sup>(?)</sup>

夜明けの一刻程前に庵室の戸を揺つた物音は鶏鳴と共に止んだというのだから、明らかに、この訪れ、天若みこの訪れを意識したものと考えられる。先に死者の世界と生者の世界が初めて直接に交錯すると書いたのは、この様な理由からである。ところが第一回発表分の四章では、夜明けの二時間前は当麻語部姥の語りの真最中である。表二で示した様に「死者の書」は章段間に時間の対応、同時進行の關係がしばしばあり、著者は対応關係の暗示をわりとていねいに書き込んでゐる。しかしこの部分に限っては全く伏線を張つておらず、第一回発表分で郎女の身の上にして叙述を進めた折には、天若みこの最初の訪れの構想は、まだ用意されていなかったと考えざるをえない。

第一回発表分の「死者の書」と第二回発表分の「死者の書(正篇)」の標題の間には、看過しがたいずれがある。この間に何らかの構想上の變化があつたのではないだろうか。「死者の書」の死者が当初から大津皇子を想定していたことは疑いないが、大津皇子が山の端に仰ぎ見られる梯人としてではなく、自身具体的に登場するという構想がいつ頃からあつたのか。少なくともその細部は第一回発表分には準備せられていなかった。多くの未完の小説や奔放に論を展開して尻切れとんぼの様に終わっている論文が示す<sup>(8)</sup>ように、折口はしばしば、構想にとられずに自由に想の赴くまま筆を進めている。「死者の書」もそれで、書いていく内に彼の中に潜在していたものが浮び上つて来る過程があつたのではないかと思われる。

「死者の書」は「日本評論」本と現行本とで冒頭の章のさしかえがあり、郎女の当麻寺到着から物語を始める形と、大津皇子のよみがえりから物語を始める形と、形の上で二種類の発端がある。しかしこれは形式上の問題にとどまら

ず、構想の上にも二つの発端があったことをさし示すと考えられる。執筆当初郎女の身の上によって物語を構想した際の発端と、「正篇」で大津皇子自身を登場せしめて急速に大きく発展したと見られる、死者——大津皇子の側から「死者の書」を構想する発端とである。「死者の書」が順次二つの発端をもって構想されたことは、作品の文学的完成度からすれば、郎女の物語と大津皇子の物語と分裂しかねない危さを生じた。しかし「史論の表現形式としての小説」としては、多重的な構造をもつことによって史論の厚みを生んだと考えられる。以下、この点について検討したい。

## 二、史論の表現形式としての小説

史論については、最近長谷川政春氏が詳細に論じられた（『史論・小説・語り手——『死者の書』論のための序章——』<sup>(9)</sup>）。氏は、折口が生をうけた明治二十年代の文学界に「史論の流行」があり、中でも山路愛山の「国民生活は如何、人情風俗の変遷は如何など」云ふ大なる問題」を史論の目的とする考えに、折口の所論との類似が見られることを指摘された。ここで私なりに折口の所論をふりかえって、「史論」の対象、目的を考えてみたい。「史論の表現形式としての劇（小説）」の考えが初めて明確に言われたのは、大正三年頃の執筆とされる小説「身毒丸」の附言である。

わたしどもには、歴史と伝説との間に、さう鮮やかなくぎりをつけて考へることは出来ません。殊に現今の史家の史論の可能性と表現法とを疑うて居ます。史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます。わたしは、其で、伝説の研究の表現形式として、小説の形を使うて見たのです。<sup>(10)</sup>

歴史と伝説の関係について、折口は「昔の人には、伝説と歴史との区別がなく、どれも實際あつたことゝ考へてゐ

た<sup>(11)</sup>」とも述べている。実際あったことと信じている人々にとって伝説は一つの歴史であり、彼らの固有の歴史観の表現であった。ずっと後の論であるが、『日本文学の発生 序説』の中で、折口は歴史と伝説について次の様に実例をあげて整理している。

此歌を見て思はれることは、当時の人々が事件直後、又は大赦後も、又乙麻呂死後も、尚事の真相などは問題とせず、かうした幾種かの歌群を中心として物語の上の古代人を思ふとおなじ態度を以て、同時代人を見て居た事が察せられる。だから、歴史は如何に正しく記されてゐても、其とは別に、今一つの伝え方が、歌や物語の上にはあつたことを考へないでは、古代の文学と事実との交流した形は、知ることが出来ぬのである。<sup>(12)</sup>

『続日本紀』によれば、石上乙麻呂は天平十一年に久米連若売との姦通事件のため土佐国へ配流せられたが、天平十三年の大赦によって都に戻つたらしく、天平十五年には従四位上を授けられた。『万葉集』巻六の一〇一九〜二三番の長歌及び短歌は、乙麻呂配流を詠んだ叙事詩的歌群である。人称によって時人が詠んだとも、本人が詠んだともとれる歌が混在している。石上乙麻呂の実人生は『続紀』の記事によって知ることができるが、『万葉集』の歌群は史実とは別に「今一つの伝え方」——乙麻呂伝説が、世間に流布していたことを示している。乙麻呂事件を、たわやめの惑いによって鄙に流される貴人の悲劇の物語として感受し、伝承する多くの人々があつたのである。折口の「史論」の対象はこうした人々にあつた。史実の背後に居って、「今一つの伝え方」をする人々の固有の観点に、「史論」の目的があつたと考えられる。

次に、大正六年八月号の「アララギ」に、折口は「史論の表現形式として劇」の題で坪内逍遙の戯曲「名残星月夜」評を書くことを予告した。

……右脚本は、略廿年以前に出版に相成り候『牧の方』と、今一つ未刊行の『右京兆』と相俟ちて三部作を為す計画の物にて、博士の内界に廿年間蓄積せられ居候史論の敷衍或は解釈とも見るべきものにて、尋常作家の概念的偶像、偶感的脚色とは撰を異に致し居り候。<sup>(13)</sup>

以上が予告の中で逍遙の史論の態度を賞讃した部分であるが、この時は何故か原稿は書かれなかつた。三年後の大正九年五月、歌舞伎座で「名残星月夜」が初演されたのを機会によりやく書かれた論（「茂吉へ」<sup>(14)</sup>）の中で、折口は厳しい逍遙批判を展開している。

故意ではないが、必然であります。此が抜きになつた歴史を主題にした作物は、つまらぬ物です。其くだらなさは、主観を真甲に、史実を方便に扱うた物と、かはりはありません。歴史家で言うて見ると、史料編纂係りの人々の歴史論と同じ事です。抜く事の出来る筈でないもの迄抜かうとする企てが、成效する気づかひはありません。けれども、其色あひに、濃淡もあり、傾向にも、良いのと、良くないのがあります。出来るだけ、史実に随順した上に、寓つて来るある物が大切な物です。<sup>(15)</sup>

逍遙の史劇は忠実な史料調査をし、なまな主観をもちこまずに、為組みに行届いた注意を配っているが、単なる史料の羅列に止まり、「出来るだけ史実に随順した上に寓つて来るある物」——「必然」が欠けているという。折口はこの論の中で、脚本を読んだ折の感想と上演を見ての感想が喰ひ違つたことを、くり返し嘆いている。読後、意気込んで「史論の表現形式としての劇」の題で評を書こうとしたが、その興奮は多分に折口の史論の考えの持ち出しによるものであつたようだ。逍遙自身の演出形式は彼をいたく失望させた。その一つが狂女の扱いである。初め折口は、狂女が実朝と並立するこの劇の主人公であると見た。そして柳田国男の「巫女考」が狂女像の暗示になつていてと感して、神憑りに

起源をもつ巫女の狂いの様式を、どんな演出で表現するだろうかと思像して楽しんで居た。ところが舞台は案に相違するもので、配役も演出も作者が狂女を単なる狂言まわし以上には考えていないことを明らかにした。

折口が狂女の役割を主人公として重く見たのは、彼が史論の考えで強調したポイント、史実の背後にある「必然」の一翼を、役廻りとして狂女が荷うと考えたためではなかったかと思われる。史実の背後にある「必然」とは、人々をかくあらしめ、かく行動せしむる根本の力を言うのであろう。折口はそれを、人々の生活・感情・究極的には信仰の上に見ていたと考えられる。

二年後の大正十一年に、折口は小説「神の嫁」を発表した。これは同時に発表された論文「万葉びとの生活」の裏打ちとして書かれた<sup>16)</sup>。万葉びとは万葉集の歌が詠まれた時代に生きた人々の全体をさす。「万葉びとの生活」は、万葉びとを「主に感情の側から視よう」とした論である。「神の嫁」は平城京、横佩家の姉姪の失踪事件をめぐって、神の嫁である巫女階級の生活を描いた、「史論の表現形式としての小説」である。万葉びとの生活の感情面の基層には、その枠組を支える信仰の問題があり、信仰を荷う巫女階級の生活があるという考えが見てとれる。

折口の「史論」の対象は史実の背後にあった。その目的は、歴史上の事件をつき動かしていく人々の有様の基層にある感情や、また史料に遠景としてしか登場しないが、史実を固有の観点から感受して、「今一つの伝え方」をしていく人々の感情の上にあったと言えることができる。

### 三、「史論」の性格

「死者の書」の出発点は大正十一年の「神の嫁」にあった。

さて、今覚えてゐる所では、私の中將姫の事を書き出したのは、「神の嫁」といふ短篇未完のものがはじめである。此は大正十年時分に、ほんの百行足らずの分量を書いたきり、そのまゝになつてゐる。が、横偏垣内の大臣家の姫の失踪事件を書かうとして、尻きれとんぼうになつた。その時の構図は、凡けろりと忘れたやうなあり様だが、藕糸曼陀羅には、結びつけようとはしては居なかつたのではないかと思ふ。その後もどうかすると、之を書きつがうとするのか、出直して見ようと言ふのか、ともかくもいろいろな発足点を作つて、書きかけたものが、幾つかあつた。さうして、今度の多岐ぶともどきの本が、最後に出て来たのである。<sup>(17)</sup>

大正十一年の「神の嫁」から昭和十四年の「死者の書」に到るまで、色々な発足点を作つて書きかえていく内に、小説の構想も主題も相当に變つてゐる。ただいづれも奈良朝に時代を設定して、万葉びとの生活を具体的に描いたことに變りはなかつた。折口は舞踊台本「万葉飛鳥之夢」の「作者のことば」に、万葉びとの生活を劇化（小説化）する際の一つの態度を示している。

まあ、万葉集を中心として、凡三百年にわたる間に起つた出来事や、人々が示した生活態度や、さういふものがないらして、考へられない事もないと思ふ。それには、何としても万葉時代にあらはれた、万葉人にあつた通用性を見出す必要がある。さういふ立場から見れば、万葉の、ある時代々々、ある個人々々の為た事を、単に一つづつとりあげて来た所で、万葉人に普遍する生活は出て来ないのである。だからなるべく、個人々々、個々の事件々々……といふより、ある一角をあげてくれば、どの時代にもさういふ事があつたのだと感ぜさせることが出来ると思ふ。<sup>(18)</sup>

「万葉人にあつた通用性」、「万葉人に普遍する生活」に中心をおいて、それを集約して表現しうるやうな「ある一角」を描くという態度である。そのため「万葉飛鳥之夢」では、「わざと天智天皇、天武天皇といふ一個の史実を表現する

にとどまる人名を避けて、兄彦、弟彦といふ神話的なる普遍性を持った名前にした。「万葉飛鳥之夢」は「万葉人にあつた通有性」に中心をおいて、万葉びとの生活を描いたものであり、「神の嫁」にも同様の態度が示されている。

これらの作品に比べて、「死者の書」は著者自身が「ある時期の古代生活」<sup>(19)</sup>を描いたと述べた通り、限定された時期にしほり込んで、万葉びとの生活の一面面を描いたことに特徴があると考えられる。「死者の書」は天平宝字四年に物語の現在を設定して、史実を緻密に書き込み、登場人物の呼称を厳密に考証している。「神の嫁」で横佩家の姉姫と伝説的な曖昧な名で呼ばれている女主人公を、藤原南家郎女として、奈良朝当時の貴族の娘のありうべき呼称を用いた。また改訂時にもこのことに留意しており、「日本評論」本で紫微内相藤原仲麻呂としたのを、現行本で大師惠美押勝に改めた。<sup>(21)</sup>ただし作中で大津皇子を滋賀津彦としたが、これは発表時宮廷のことに異常に敏感であつた一部の勢力を意識してのことで、著者の本意ではなかつた。<sup>(22)</sup>

史実の書き入れの例としては、天平宝字元年の勅<sup>(23)</sup>に従つて、氏神祭に大勢の氏人が集会するのは三、四年来の法度であるとし(八章)、またこの前後の緊迫した国際情勢を反映して、新羅問罪のため筑紫へ下る一行があつたとある(十二章)。八年前に東大寺の大仏開眼供養が行なわれ(十四章)、今年はまだ四天王像の開眼が行なわれる予定で、都はその評判で持ち切りであるとあり、仏教隆盛の都の様子が描かれている。またその噂話の中に押勝、道鏡、広嗣をめぐつて、過去の広嗣の乱を思い、近い将来の動乱の予感に戦々当時の不穏な世相が巧みに織り込まれている(八章)。

注目されるのは、これらの史実の書き入れが単なる時代背景の指定にとどまらず、物語の展開や登場人物の内面と緊密な関係をもつことである。大伴家持は神代以来の家職を、氏人を集えて盛んに行ないたいと願ひ、年々の氏神祭に力

を入れているが、このような時勢の中で、自分が「何だか空な事に力を入れて居たやうに思へてならぬ」のである（八章）。もう話部の物語などに信をうちこんで聴く者はほとんどいなくなった時代であり、それ故にこそ、当麻語部姥は郎女の「もの疑ひせぬ清い心に知る限りの事を語りかけよう」としたのである（二十章）。

天平宝字四年を用途とする時期にしほり込んで、万葉びとの生活を変化の相に着目して描いた所に、「死者の書」の「史論」の前記作品と対照的な特質がある。しかし史実に依拠して変化して行く部分だけを描くのではなくて、変らざる部分とのつながりを維持しながら、歴史を固有の観点から享受する層を重層的に描いた所に、本作品の厚みがあり、折口の「史論」の本質があると考えられる。折口は次の様に述べている。

世人は新しい歴史を受けとるのに、旧来の馴れた見方からした。而も其を少しでも人に伝へようとする際には、旧表現の類型によつて示すのであつた。（中略）新しい歴史の新しい形は、勿論目を以て見、耳もて聞きするのであるが、如何せむ、人々の理会は、事実に順応する程、自在でなかつた。之を感受するのも、之を話説するのも、皆依然たる旧解説を通して、享け入れ、伝へられるのであつた。歴史記録は、目前の事を明らかに正しく叙述するが、現在の生活者としての伝へ方は、旧手段による外はなかつた。<sup>(25)</sup>

歴史の新しい形を、大多数の人々は旧来の類型を通して享け入れ、伝えて行くのであり、そこに生活としての歴史の受容の姿があるという。「死者の書」では南家郎女を中心とする世界に、生活としての歴史の受容の姿が具体的に描かれていると思われる。以下「死者の書」の三つの世界を分析して、これを検討したい。

場 所	主 要 登 場 人 物	世 界
二上山の塚の中	大津皇子	前代（普遍的古代）
二上山麓 当麻	藤原南家郎女・当麻語部姥・郎女の乳母や侍女たち・ 里の女たち	当代の基層部分
平城京	大伴家持・惠美押勝・都人たち	当代

死者、大津皇子は死に際に耳面刀自につないだ執心を抱いて、過去の世界からそのままよみがえった。名を伝えてくれる子孫をこの世に残したいという宿執であるが、これは古代人がひとしなみに抱いた願望であり、万葉びとに普遍的な幸福感のひたすらなる追求である。折口は感情のとらわれのない発露、いかなる障害にも屈しない執心を、古代人の理想とする心性と考えていた。作中にも

あきらめと言ふ事を、知らなかつた人はかりではないか。……昔物語りに語られる神でも、人でも、傑れた、と伝へられる限りの方々は――<sup>(26)</sup>

とある。大津皇子の執心はこれに属する。また大津皇子は当麻語部姥が言うように、隼別皇子でも天若日子でもありうる。天の日に矢を射かける、極みなく美しい謀反者として通有性をもつように描かれている。このように大津皇子は前代からよみがえった者であり、その特性は普遍的な古代を代表している。

当代を代表する大伴家持は、折口の家持論をそのまま具体化して描かれている。

○家持は其時から大伴氏一族の長として、重い責任を負ふ事になつたのである。一族の族人の為、一族の昔から祀

つた大伴の氏神の為に。而も新勢力興隆の勢ひは、殆此古い歴史を持つた豪族の最後まで迫つて止まなかつた。

○やつと支那の文学にあるやうな要素が、日本の歌にもあることを発見したばかりの時代に、文学の中のある特殊な近代的な情趣を擲むことが出来た家持であつた。寂寥や孤独感が、とりあげて文学にすることが出来ることを知つた彼であつた。

○彼には長い昔と、新しく迫つて来る未来とが、彼の心を重くした。併し、此をどうする事も出来ずに過ぎた人である。<sup>(27)</sup>

家持は大伴氏の氏上として前代以来の氏族の有様と、律令によって組織化された朝廷の機構との間の矛盾に悩み、政治戦争の只中に生きた。折口は「死者の書」でこの様な史実の内実を具体的に描くと共に、家持の心の問題、感情面に目を向けている。作中で家持は大伴の家の行末を案じ、時代に乗り遅れた宿命の暗い先行きを予感しながらも、そのことに長く執着していることができない。すぐに「洗ひ去つた様に心がすつとしてしまふ」人物として描かれている。彼は中国の文学を享受することによって、昔の神々や英雄の世界には表現されることのなかつた、あきらめの感情を身に沁ませているのである。このような家持の心の有様は、大津皇子の執心と対蹠的である。こうした微妙な感情の変遷を綿密に描写する所に、折口の「史論」の立場がよく現われており、「史論」が小説として表現されねばならぬ必然性を見ることができる。家持は漢籍の影響を受けて感情形成した、奈良朝中末期の知識人の有様を示しており、当代の最も当代的な部分を代表するといふことができよう。

郎女を中心とする当麻の世界は、前二者をつなぐ位置にある。南家郎女は大津皇子の宿執におびかれて当麻に到り、倂人のために衣を織る「神の嫁」の生活をするが、その郎女の目に映ずる倂人の姿は莊嚴な阿彌陀仏の姿である。郎女

は一身の内に、前代以来の「神の嫁」の性格と、新しい信仰である仏への讃仰を、何の矛盾もなく併せ持つように描かれている。郎女は藤原南家の深窓で乳母や語部たちの伝統的な教育を受けて、藤氏の一の姫（春日神の「神の嫁」となるべく生い育ったが、それと同時に法華経、称讃浄土仏撰受経等を手習いした。経典を知識的に読み解くのではなくて、解らぬままに手習いする内に、教えが身に沁み込んで行く、そういう享受である。<sup>(29)</sup>知識としての理解ではないから、心の中に迎え入れる基礎のある部分だけが了解され、身に沁み込んで行くのである。それ故、郎女の内面では神代以来の昔語りも、新渡来の經典の教えも、何ら矛盾をきたさずに受容されている。従って、郎女は何の疑いもなく旧来の類型、神に仕える「神の嫁」の生活を踏襲して、讃仰する佛人——仏のために衣を織って仕える。「神の嫁」である巫女の資格をもつ處女が仏教を生活として受容していく様が具体的に描かれているのである。

また当麻語部姥は神代以来の語部の職掌を守り、時代の移り行きの中で庇護者である当麻真人家からも、一般の人々からも、見捨てられて滅び行く者であるかのようにだが、物語の後半部で尼形で現れることが注目される。

当麻信仰には、妙に不思議な尼や、何ともわからぬ化身の人が出る。謡の「当麻」にも、又其と一向関係もないらしいもので謂つても、「朝顔の露の宮」、あれなどにも、やはり化尼が出て来る。曼陀羅縁起以来の繫りあひらしい。私の場合も、語部の姥が、後に化尼の役になつて来てゐる。此などは、確かに意識して書いたやうに覺えてゐる。

(中略) 老語部を登場させたのは、何も之を出した方が、読者の知識を利用することが出来るからと思ふのではない。殆無意識に出て来る類型と撰ぶ所のない程度で、化尼になる前型らしいものでも感じて貰へればよいと思うたのだ。<sup>(30)</sup>

これと「小栗判官論の計画」<sup>(31)</sup>等をあわせてみると、折口の考えは以下のようなものであったと考えられる。中将姫の

物語を語り、当麻曼陀羅の信仰を説く尼形の唱導者の一群があり、中将姫伝説に登場する化尼は、こうした語り手の反映である。「死者の書」の語部姥は、化尼に尼形の唱導者の前型を感じて貰えればよいと言う。折口は「ほかひ人の論」で次の様な考えを示している。語部等の邑落の神人が信仰の退転に遭い、保護者を失って本貫を離れ、漂泊する「ほかひ人」となった。それがある時期から仏教的唱導者の群れに吸収されて行くと言う<sup>(32)</sup>。当麻語部姥が後半で尼となって現れるのはこの道筋を暗示すると考えられる。従って、当麻語部姥は一見滅び行く前代の遺物であるかのように見えるが、実はある部分を維持しながら、時代の波を受けて装いを新たに変わって行く階級を暗示するものである。この様な階級が仏教の生活としての受容をおし進めたのである。結局、郎女を中心とする当麻の世界は、前代の伝統を継承しながら、時代の移り行きの影響をゆるやかに受容して変容する部分と、変らざる部分をなймаぜに併せもつ世界であり、当代の基層をなす部分であると言うことができる。

「死者の書」はこの三つの世界、普遍的古代と当代と、両者の間をつなぐ当代の基層部分を鮮やかに描き分け、重ね写真の様に重ね合わせた所に、万葉びとの生活の一断面を描いたものである。小説形式をとることによって、位相の異なる三つの世界の微妙な重なりと、維持せられるものと変容するものの絡まりあう複雑な相貌を、多重的に表現することに成功した。「史論の表現形式としての小説」の持論の見事な実現である。

#### 四、結 語

長谷川政春氏はメレジュコフスキーの小説『背教者ジュリアノ』の影響が「死者の書」にあることを指摘された<sup>(33)</sup>。折口は次の様に述べている。

私一己にとつては、じゆりあん皇帝を扱つたためれじゆこふすきい氏の文学は、文学と言ふよりは、生活として感じられた。精神として感じられた。つまり史学よりも、もつと具体的な史学として、我が大和・寧楽に対する比較研究の情熱を促したのであつた。<sup>34)</sup>

『背教者ジュリアノ』は古代ギリシア・ローマの神々が、キリスト教のために滅びていく時代、「神々の死」を描いた小説である。<sup>35)</sup>長谷川氏が指摘された通り、折口はこれに触発されて、「死者の書」で奈良朝における「日本の神々の死」を描いたと考えられる。

日本の神は純粹に宗教として組織されたことはなかった。古代の日本の神は、万葉びとの生活の基層をなす信仰として存在した。だから奈良朝における「神々の死」は、生活における信仰の変容の問題である。ただし申すまでもないが、折口は日本の神が仏教によつて滅んだとは考えていない。

思うて見れば、日本の神々は、曾ては仏教家の手によつて、仏教化されて、神の性格を發揚した時代もあります。仏教々理の上に、日本の神々を活かしたこともあつた訣です。さういふ意味において、従来の日本の神と、其上に、仏教的な日本の神といふものが現れて参りました。併し同時に、さういふ二通りの神をば信じてゐたのです。<sup>36)</sup>

日本の神が仏の守護神として仏教化された後も、人々は仏教化された神と従来の神と、同時に二通りの信仰を併せもつていたのだという。仏と全く関わりを持たぬ神はなかつたのだから、ここは一つの神の上に仏教化された神と、従来の神と、二重に信仰が重なつていたことを考へてゐるのである。これは、仏教の生活としての受容によつて、従来の信仰が維持せられて行く部分と、変容する部分とが、複雑に絡み合い、併行することを見すえての論であらうと思われ

「死者の書」は、古代ギリシア・ローマの「神々の死」との比較の興味から発して、我が国の万葉びとの生活の基層にある信仰の変容を描いたものであった。「死者の書」の主題は、仏教の生活としての受容の姿にあり、維持せられて行くものと変容するものとが、複雑に絡み合う「日本の神々の死」の相貌にあったと考えられる。

注

- (1) 『日本近代文学大系 46 折口信夫集』解説など
- (2) 『死者の書』あるいは二つの作品V「国文学 解釈と教材の研究」第二二卷七号所収
- (3) 本稿では作中「滋賀津彦」と呼ばれている死者を、大津皇子と呼称したい。その理由は注(22)を参照されたい。
- (4) 座談会『死者の書』をめぐって」再刊『折口信夫全集』第廿四卷月報
- (5) 「山越しの阿彌陀像の画因」『全集』第廿七卷 一八〇頁
- (6) 『日本近代文学大系 46 折口信夫集』六二頁。以下「死者の書」の引用は特に断わらない限り、この本による。
- (7) 『大系』六六頁
- (8) 例えは「水の女」等
- (9) 「東横国文学」第十六号 昭和五九年三月
- (10) 『全集』第十七卷 五三〇頁
- (11) 『全集』第十二卷 三〇四頁
- (12) 「小説戯曲文学における物語要素」『全集』第七卷 二五六頁(昭和一八年一月発表)
- (13) 「アララギ」第十卷第六号
- (14) 後に「芝居に出た名残星月夜」と改題。『全集』第十八卷。この論の執筆事情とその後の複雑ないきさつについては、加藤守雄先生の「アララギにおける過空」——『折口信夫伝』所収に詳しい。
- (15) 『全集』第十八卷 三一八頁
- (16) 「零時日記Ⅲ」『全集』第廿八卷 二三頁

- (17) 「山越しの阿彌陀像の画因」『全集』第廿七卷 一八〇頁
- (18) 『全集』第廿四卷 五二九～三〇頁
- (19) 「山越しの阿彌陀像の画因」『全集』第廿七卷 一八二頁
- (20) 『大系』の注で池田彌三郎先生が天平宝字四年と断定された理由は、書かれていないので明らかでない。「日本評論」本と現行本を比較すると、著者は改訂時に年立ての補整を加えており、それは即ち父、豊成が橘奈良麻呂の変に連座して、太宰員外帥に左遷されてからの身の処置に集中しているため、一応これが年立ての規準であると考えられる。豊成左遷は天平宝字元年七月であり、現行本では八章（八三頁）に左遷は「さきをとゞし」のこととあり、六章の叙述もこれに一致するので、物語の現在は天平宝字四年と推定される。ただし著者は「日本評論」本では物語の現在を天平宝字二年としていたらしい。十八章（現行本の章数）で淳仁天皇即位（天平宝字二年）のことが見え、八三頁の豊成左遷が「さきをとゞし」とあるのは、「日本評論」本では「去年」とあった。ところが、「日本評論」本の年立てには明らかな矛盾があった。即ち女の称讃浄土経千部書写は「日本評論」本でも一年以上かかっており、これからすれば物語の現在は天平宝字三年としなければならぬ。著者は改訂時にこのことに気がつき、年立てを全面的に改めて、現在の形に直したと考えられる。ただし淳仁天皇即位のことは何故かそのまま残したので、現行本はこの点に混乱があるが、以上の様な事情なので、現行本の著者の意図が天平宝字四年にあることは動かせないと思われる。
- (21) 藤原仲麻呂は天平宝字元年五月に紫微内相に任ぜられ、翌二年八月に大保となり、藤原惠美朝臣押勝の名を賜わった。天平宝字四年正月に大師に任ぜられた。（『統日本紀』）
- (22) 『大系』補注三 四三七頁に詳しい。本稿は、「万葉飛鳥之夢」で天智天皇を滋賀ノ皇子とした態度と区別するために、滋賀津彦を一貫して大津皇子と呼称した。
- (23) 「六月乙酉。制勅五條。諸氏長等或不預公事。恣集己族。自今以後。不得更然。」（『統日本紀』天平宝字元年）
- (24) 『大系』補注八三 四五二頁に詳しい。
- (25) 「小説戯曲文学における物語要素」『全集』第七卷 二五六頁
- (26) 『大系』八八頁
- (27) 「評価の反省」『全集』第九卷 五〇九・五一八・五二二頁

- (28) 折口信夫「七夕祭りの話」を参照されたい。『全集』第十五卷
- (29) 手習いについては、折口信夫「日本文学の発生——その基礎論——」等を参照されたい。『全集』第七卷
- (30) 「山越しの阿彌陀像の画因」『全集』第廿七卷 一八一〜三頁
- (31) 『全集』第三卷
- (32) 「国文学の発生(第四稿)」『全集』第一卷 等。なお折口の「ほかひ人の論」については、吉田修作氏が「ほかひ人の論」(『折口信夫 まれびと論研究』所収)で詳しく検証された。
- (33) 「史論・小説・語り手―『死者の書』論のための序章―」
- (34) 「寿詞をたてまつる心々」『全集』第廿九卷 二九六頁。この論文は昭和十三年五月、「日本評論」に発表された。「死者の書」の執筆と時期が近接しており内容的にも密接な関係をもつと考えられる。
- (35) 「ホトトギス」増刊第三冊 明治四十三年十一月発行
- (36) 「神道の新しい方向」『全集』第廿卷 四六四〜五頁